

若い研究者へ (2)

小嶋 祥三

わたしは1972年、早稲田大学の博士課程2年で中途退学し、京都大学霊長類研究所に赴任した。そして、2003年に慶應義塾大学へ転出した。以下に述べることは、わたしが霊長類研究所に在職した年までのことであり、その後の研究所の変化について、わたしはよく知らない。これは『若い研究者へ』の追加、背景説明のような文章でもある。

わたしが大学院生の頃、大学は紛争で荒れていた。わたしは大学紛争にはタッチしてこなかったのでよく分らない面もあるが、1972年に赴任した研究所もその影響が残っていたと思う。紛争では学生が教授を糾弾することがあったようだが、その影響だろうか、研究所では教授から助手（昔の職階名で）まで教員を平等に扱うことになっていた。それを制度として表現していたのは教員全員が参加する協議員会で、研究所の最高の意思決定の場だった。学部であれば、教授会に当たるものだろう。教員は平等なので、予算は全員に均等に配分され、助手から人事権を持っていた。大学院教育を行うかに関する議論があったが、最終的に受け入れることになったらしい（わたしの赴任前に決定されていた）。わたしは1月に赴任したが、4月に大学院生の一期生が入ってきた。大学院生は研究する部門（分野）は決まっていたが、研究所の各部門に属するよりは院生会に所属すると考えられていた。それゆえ、院生には部門ではなく院生会用に独立した部屋が用意された。大学院生も一人前の研究者として扱おうという精神の表れだったと思う。

わたしは心理研究部門の助手になったが、若かったこともあり、この研究所のシステムは居心地が良かったように思う。部門の長であった恩師・室伏靖子先生は、このような制度と関係なく、大学院生や若手研究者の希望、興味を尊重してくださった。われわれが自由に自らの興味を追求するのに助力を惜しまれなかった。俗な表現だが、「金は出すが、口は出さない」といった態度で接してくださった。先生にはとても感謝している。このホームページの『若い研究者へ』で「わたしは幸運だった」と書いたのはこのことを指している。わたしは在職の最後4年間は所長だったが、協議員会制度とその精神を維持したつもりである。このようなシステムのよいところは若い研究者が自由に自分の興味を追求できることだ。加えて、霊長類研究所は共同利用研究所だったので、外部の研究者と一緒に研究しやすかった。多くはないが旅費と研究費がでて、他の研究機関の人たちを招くことができた。そして、そのつながりを発展させることも可能だった。教員は平等なので、助手でもこの制度を自由に利用できた。この点も『若い研究者へ』でふれておいた。

このような霊長類研究所のシステムは、大学紛争の影響だけでなく、京都大学の「自由な学風」に根差したものだっただのかもしれない。わたしは所長のときに、研究所にサルの

繁殖・供給センターをつくろうとしていた。いろいろな方面に要望、アドバイスをもらいに行った。当時総合科学技術会議議員だった元京大総長・井村裕夫先生にもお願いがあがったが、その時にノーベル賞と京大の関係が話題になった。井村先生は京大では若い人が自由に研究できたことがよかったのではないかと話された。たしかに、若い頃の研究が授賞の対象になっているようだ。無論、自由は両刃の剣でもある。サボろうとしたらサボれるので、「なんとなく」大学院にきた者は注意しないと自分の道を見つけられずに、流されてしまうこともあるだろう。結果については自分で責任をとらねばならない、自己責任が問われる厳しい世界でもあるのだ。

わたしは早稲田大学の学部、大学院でラットの脳（主に、視床下部）の電気刺激や損傷の実験を行っていた。文学部で孤立しており、設備は貧弱で、実験にかかる費用は自前の部分もあったように記憶している。それが、霊長類研究所へ赴任すると、何というか、天国のようだった。同僚はみな優秀で、わたしが持っていない多くのものを持っていた。研究所には神経生理学、生理学、生化学、遺伝学、人類学、生態学、獣医学の研究部門、施設があり、共通して霊長類を相手にしていたので、ある意味、相互の垣根が低く、まとまりが良い面があった（実験系とフィールド系の対立の解消には時間が必要だったが）。わたしは神経生理研究部門でニューロン活動の記録やコンピュータについて学ぶことができた（神経生理部門の助教授もやらせていただいた）。自分で科学研究費補助金をとれるようになってきたし、室伏先生は先生が代表でとられた研究費を若手研究者が使えるように配慮して下さった。自分が先生と同じ立場に立った時、同じようにしたつもりである。

わたしもそうだったが、若い研究者は上の研究者の行動を見て育つ。上が論文を書かなかったら、下も論文を書かなくていいと思ってしまう。上の先生が大型の研究費を申請して、その領域の研究の進展に貢献するのを間近でみる。若手研究者の中には、自分では気がつかない多くの才能が眠っている。『若い研究者へ』でわたしがレベルの高い研究機関で学ぶことを勧めたのは、眠っている才能を覚醒させる確率が高くなるからだ。若い研究者が自分の能力を信じて、活躍することを期待している。